

あの悪夢のような大震災から、早や三カ月が経とうとしています。まるで第二次大戦後の焼け野が原を彷彿させる東北地方・東海岸の壊滅的な眺望は、自然の猛威の底知れぬ恐ろしさを遺憾なく知らしめるものでした。それでも人間が素晴らしいのは、全国津々浦々から、そして世界の国々からも東北への支援が力強く繰り広げられていることです。様々な支援の輪が展開される中で、今回、沖縄県医師会が総力を挙げて取り組んだ医療救護支援チームの活躍は、特筆ものであります。取り分け、3月11日の大震災発生を受け、直ちに医療救護支援チーム派遣の必要性を県医師会に訴え、そして自らが第1陣のメンバーとして出陣された名桜大学・出口宝先生の篤志とその機転は、我々医療人の鑑であります。また第4陣で被災地に入られた沖縄大学・山代寛先生の実にvividな現地レポートは、県医師会内部の支援ムードを弥が上にも火をつける大きな役目を果たしました。お二人の活躍に触発され、本誌でも「東日本大震災医療支援」の特設コーナーを設置して、逐次、派遣された医師の体験記を掲載しておりますが、今月は長嶺信夫先生と阿部好弘先生から2題を頂いています。福島の子力発電所の事故が重畳し、東北復興のロードマップをより一層、複雑・困難なものにしていますが、最早この緊急事態は東北一地方の問題ではなく、全国的な課題であり、我々一人一人に何ができるかを問われている様な気がします。

さて今月も本誌は盛り沢山の記事で満載です。先ず3月24日に行われた沖縄県医師会定例代議員会ですが、県医師会活動に係る平成22年度決算および平成23年度予算の審議については、滞りなく承認されました。諸々の細かい内訳は本文を参照頂きたいと思えます。地区医師会から上がりました代表質問は、①県の国保・健康増進課の暴走とも云える特定健診の取り扱い、②高点数を狙い撃ちにした保険診療指導のあり方、③医療ツーリズムやカジノ導入についての3題で、何れも興味深い論議がなされています。次に、今年で3回目を迎えた研修医

の歓迎レセプションは、県立、琉大、群星と3つの研修プログラムに参加する新卒の研修医、総勢122人が一堂に会する盛大な企画で、仲井真知事も馳せ参じて、“臨床研修のメッカ沖縄”を大いにアピールして頂きました。

生涯教育コーナーは、石川清司先生の「縦隔腫瘍—自験361症例の臨床的検討」です。'09年に新規改定された規約に則って多数例にのぼる自験例の再評価を行っていますが、病型や組織型が複雑な縦隔腫瘍を分かり易く解説されています。今回で第4報となる藤田次郎先生の「沖縄県喘息死0、および喘息発作による救急受診0を目指して」は、県内主要病院の呼吸器科医による調査研究活動を総攬したもので、吸入ステロイドの普及率の他、短時間型吸入 $\beta$ 刺激薬の問題、喘息死と診断される高齢者の問題等々、幾つかの重要な問題点が浮き彫りになりつつあるようです。

「若手コーナー」として掲載された南山病院・譜久原朝和先生、辻下洋介先生の「全職員でタバコをやめる」には仰天しました。精神病院での禁煙実施は現実的に不可能だろうという、一般的な、或いは筆者の浅はかな先入観は完璧に否定されました。全入院患者および全職員450人が禁煙を達成するまでの6年の歳月は、並大抵の苦勞ではなかったと思えますが、先ず医師が率先して禁煙し、次いで全職員が止め、そして最後に患者まで推し進めるという戦略はむべなるかなで、真に感服いたしました。

その他にも、今月の「月間（週間）行事コーナー」には琉球大学の細川篤先生と名護皮ふ科・金城浩邦先生に「ハンセン病を正しく理解する週間に因んで」、米須歯科医院・米須敦子先生に「歯の衛生週間に寄せて」、県福祉保健部業務疾病対策課・上里林課長に「薬物乱用のない社会環境づくり目指して」をそれぞれ執筆頂きました。また当山美容形成外科・當山護先生からは「第37回日本医学脱毛学会」の開催報告を投稿して頂きました。厚く、お礼を申し上げます。

広報担当理事 當銘 正彦